

日常の中で人々が目を留める風景の 特徴と意識に関する研究

1X17D005-4 有西希海*

日常の生活中で、特に意識が向けられることがない風景に対しても何かのきっかけで目が留まることもある。日常風景の重要性が意識されつつある中、本研究では、無意識的な状態において目が留まるような日常の風景がどのようなものなのか、またどのようにして意識されるのかについて、日常風景に関する実験的調査によって得られた写真とテキストデータより把握することを試みた。その結果、目が留まるような日常の風景は風景の構成要素や当時の状況、印象などによって複数のタイプに分類でき、風景が意識される要因としては風景の中に存在する特定の要素のみならず、風景全体の構図や雰囲気、さらには主体の心情や気分なども影響していることが明らかになった。さらに日常風景に対する再認識を高める第一歩として、主体が日常風景に興味・関心を持つことが重要であることが示唆された。

Key Words : 日常風景, 風景写真, 風景認識, アンケート調査, クラスター分析, KJ 法

1. 研究の背景と目的

(1) 研究の背景

日常の生活中で、特に意識が向けられることがない見慣れている風景に対しても、ふとした瞬間や何かのきっかけで目が留まることがしばしばある。そのきっかけは例えば、木々から差し込む光、といった些細なことである場合も少なくない。

日常における風景については、景観分野において後藤らによって「人間の営みが色濃くにじみだした景観」と定義される「生活景」という概念¹⁾が1990年代後半より注目されており、住民や来訪者による生活景の捉え方を対象とした研究²⁾など、生活景を捉えるために様々なアプローチがなされている。

また、2020(令和2)年の新型コロナウイルス感染症(以降「コロナ」と表記)拡大防止策として推進されてきた大学の授業オンライン化や在宅勤務は定着がみられ^{3,4)}、現代はライフスタイルの一つの転換期を迎えているといえる。自宅および自宅周辺にいる時間が長くなったことで、逆に身近な場所を歩くなど、日常的な環境へ意識が向く機会が増えたと想定される。このようなことから、日常風景の重要性が意識されており、さらに今後ますます高まると考えられる。以上より、何気ない日常風景について考える上で無意識的な状態において目が留まる風景に着目することは、今後の日常風景に関する議論において一つの手がかりになると考えられる。

(2) 研究の目的

本研究では、日常の中で無意識的な状態において目が留まるような風景に着目し、そのときの状況や眺めの構成要素・構図、および日常風景が意識される仕方に対する自省的考察を把握することで、日常の中で目が留まるような風景はどのようなものなのか、また、どのようにして意識されるのかを明らかにする。

(3) 既存研究の整理

本研究に関連する既存研究を以下に示す。

a) 日常風景の価値を考察した研究

吉村⁵⁾は、普段意識することのない身の周りの風景を「無名の風景」と呼び、そのような風景を題材とする写真家の写真作品および展覧会の方法を分析することで「無名の風景」は無意識的に体験化され、身体化されるような風景であることを論考した。

b) 写真から景観タイプを把握した研究

平尾ら⁶⁾の研究では、写真展に出展された写真を対象として、対象地域における好まれる景観タイプの類型化を行っている。テキストから判断した景観の意識要素と、写真から判断した構図的特性と構成要素の結果から、17組の構図タイプに分類した。

既存研究より、日常の風景は自身の体験によって捉えられること、好まれる日常の風景には構図や捉え方にパターンが存在することが明らかになっている。しかし、対象地における住民の風景認識を考察

*早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 景観・デザイン 佐々木葉研究室 学部4年

する際、好きな、あるいは嫌いな風景を対象として調査しているものが多く、選好性に捉われずに日常風景そのものに着目して研究されているものは少ない。日常風景の重要性が認識されつつある中、風景の選好性だけでなく、普段意識されないような日常風景を拾い上げ、整理することが必要と考えられる。

(4) 本研究の位置づけ

本研究では、選好される日常風景に限らず、幅広く日常風景について捉えることを試みる。日常風景を扱った既存研究では写真分析かテキスト分析のどちらか一方での方法で考察しているものが多いが、本研究では、写真とテキストの両面を考察の対象に含めて進めていく。また、コロナの影響による生活様式の転換により、自宅およびその周辺に滞在する時間が長くなったことから、現在において日常風景について扱う本研究には意義があると考えられる。

(5) 研究の方法

普段意識されないような日常風景に対する一定の条件が揃ったデータを得るには、日常風景に改めて目を向けてもらうことを促し、風景について考えてもらう、という段階を踏むことが必要と考えられる。そこで本研究では、実験的に日常風景に「目が留まったとき」の写真撮影とアンケート調査を行う。実験的方法をとることで、完全に無意識的な状態のデータをとることはできないが、本研究の関心が日常風景に対する主体の再認識を高めることにあることから、この方法をとることとした。

2. アンケート調査

(1) アンケート調査の目的と方法

アンケート調査では、日常で目が留まった風景の写真とそのときの状況のデータおよびそれに対する主体の考察を把握する。アンケートでは「日常風景」のイメージを持ちやすいよう「身近な眺め」という言葉を用いている。アンケート調査の概要とアンケート設問概要を示す(表-1、表-2)。回答方式は主に予備調査や既存研究を参考にした項目による選択式としている。

表-1 アンケート調査の概要

実施期間	2020年11月下旬～12月上旬
調査対象者	景観に関する講義を受講する大学生
回答方法	フォーマットに記入後、オンライン上で提出
回答者数	147人
写真枚数	606枚

表-2 アンケートの設問概要

シート番号	回答方式	内容	詳細
シート1	選択式・一部記述式	回答者自身について	①居住地について ・居住地の郵便番号 ・居住年数 ・居住地周辺の様子(土地利用、周りにある自然や施設) ②外出行動について ・散歩をする頻度 ・買い物(コンビニやスーパー)に行く頻度 ・最寄りの駅やバス停に向かう頻度 ③身近な風景・まちの様子について ・身近な眺めが目に留まる頻度 ・身近な景色を写真で撮る頻度 ・身近な景色や出来事をSNSで発信する頻度 ・今住んでいるところへの愛着を感じる頻度
シート2～7	選択式・一部記述回答可	写真について	①撮影した場所を訪れる頻度 ②当時の状況 ③撮影したきっかけ ④当時の気持ち・気分
シート8	記述式	写真・風景について	①撮影した写真をふりかたって気づいたこと ②日常風景について思うことや気づいたこと

(2) 分析方法

データ分析は大きく以下の3つの流れで行う。

a) 回答者の属性の整理

回答者属性およびコロナ前後の行動の把握を行う。

b) 写真の分析

以下の2つの仮説を立て、「撮影したきっかけ」を「目が留まったきっかけ」と捉え、写真の類型化によって検証する(図-1)。

- ・同じような風景でも目が留まるきっかけには複数のタイプが存在し、それは目が留まったときの状況やその場所を訪れる頻度、感じた気持ちや気分と関連性がある。
- ・そのタイプごとに、写真に写されている要素および写真の構図に共通する特徴がみられる。

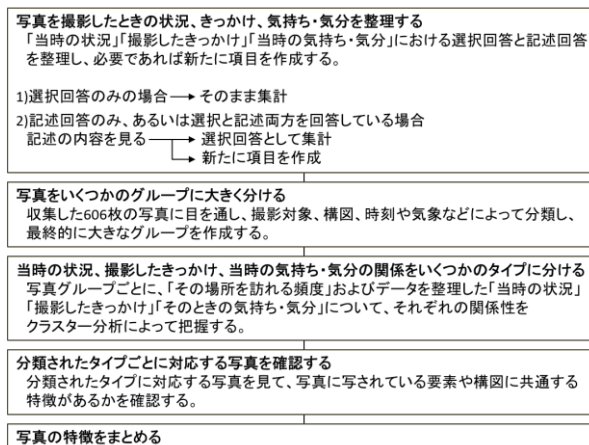


図-1 写真の分析の流れ

c) 自由記述回答の分析

撮影した写真をふりかえてみて考えたことや気づいたこと、また、日常風景について考えたことや気づいたことについて記述してもらった回答を、それぞれ KJ 法により整理する。これにより、日常風景がどのようにして意識されているのかを考察する。

(3) 回答者の属性

回答者の居住年数と居住地周辺の様子を集計結果を示す（表-3）。

表-3 回答者の居住年数と居住地周辺の様子

居住年数 (N=147)	居住地周辺の土地利用の様子* (N=147)	居住地周辺にある自然や施設* (N=147)
1年未満 15	戸建住宅地 104	川や池などの水辺 77
1～5年 24	中層の団地・集合住宅地 68	海 10
6～10年 19	高層マンションもある住宅地 28	坂 82
11～15年 26	商店街 52	公園 131
16年以上 58	オフィスなども含む用途混在地 22	空き地・駐車場 101
無回答 5	田舎が混在する地域 25	グラウンド 50
	かなり自然が残っている地域 14	小中学校や保育園 119
		神社・寺院 85
		コンビニエンスストア 130
		大型ショッピングモール 26

*複数回答可

コロナ前後における外出行動の変化、日常風景やまちへの認識の変化を示す（図-2、図-3）。外出行動について、週2、3回以上という回答に注目すると、買い物に行く頻度と最寄りの駅やバス停に向かう頻度は減少しており、散歩をする頻度は増加していた。日常風景やまちに関する認識は、「よくある」と「ときどきある」と回答した人の割合は各質問項目とも増加していた。以上より、普段の外出行動として移動自体を目的とした「散歩」という行動の占める割合が相対的に増えたことで、日常の風景に意識が向くことが増えたと考えられる。

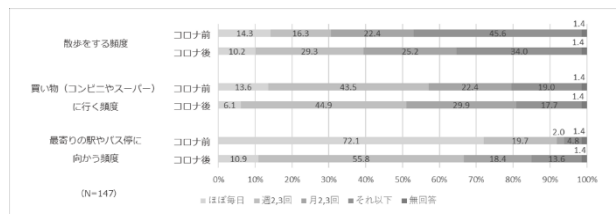


図-2 居住地周辺における外出行動の変化

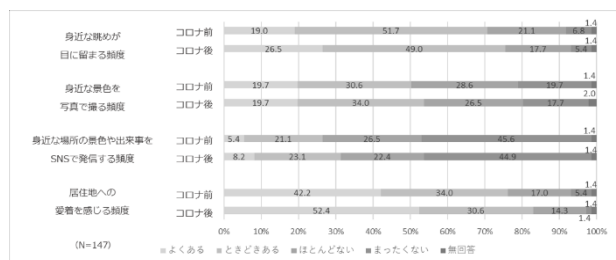


図-3 日常風景やまちへの認識の変化

3. 目が留まる日常風景の特徴

選択回答と自由記述回答を整理した上で、全ての回答項目にIDを付与した（表-4）。次に収集した写真を撮影対象、構図、時刻や気象などによって分類し、「自然」「空」「まちなみ」「被写体」の4つに大別した（表-5）。

表-4 撮影したきっかけの整理

質問	種類	ID	項目	質問	種類	ID	項目
その場所を訪れる頻度	用意していた 選択項目	1a	初めての場所	撮影した きっかけ	用意していた 選択項目	3a	色や形などの何かの動き
		1b	まれに来る場所			3b	眺めの全体的な構図や雰囲気
		1c	ときどき来る場所			3c	風、音、匂いなど身体で感じたこと
		1d	いつも来る場所			3d	何か思い出したり、気づいたりしたこと
当時の状況	用意していた 選択項目	2a	歩いているとき	新たな項目	3e	よくわからない	
		2b	走っているとき		3f	季節を感じたこと	
		2c	屋外で座っているとき		3g	光の存在	
		2d	バスを待っているとき		3h	眺め・対象物への興味	
		2e	信号待ちをしているとき		3i	何かを連想させたこと	
		2f	電車を待っているとき		3j	記録として残しておきたい	
		2g	自転車に移動しているとき		4a	想い	
		2h	バスで移動しているとき		4b	さもちみい	
	新たな項目	2i	自宅にいたとき	4c	嬉しい		
		2j	自宅以外の室内にいたとき	4d	すがすがしい		
		2k	散歩しているとき	4e	癒かしい		
		2l	自転車に移動しているとき	4f	はっとした		
当時の 気持ち・気分	用意していた 選択項目	4g	驚いた	新たな項目	4g	驚いた	
		4h	不思議		4h	不思議	
		4i	いやだな		4i	悲しい	
		4j	悲しい		4k	せつない	
		4k	せつない		4l	うとうとし	
		4l	うとうとし		4m	驚いた	
		4m	驚いた		4n	泣きそう	
		4n	泣きそう		4o	すっきりした	
	4o	すっきりした	4p	安心した			
	4p	安心した					

表-5 写真のグループ化

グループ	ID	特徴			枚数	
自然	i	説明	季節や天候、植物など時間の変化に伴って変わる眺めが撮影されたもの			156
		例				
空	ii	説明	空の色や雲など空に着目して撮影されたもの			183
		例				
まちなみ	iii	説明	住宅街や街路など、まちなみが撮影されたもの			186
		例				
被写体	iv	説明	動物や建物など、なにか特定の被写体が撮影されたもの			81
		例				
計606						

以上のデータ整理後、写真グループごとに撮影したときの状況のタイプを分類するために回答項目に付与したIDを使い、ward法に従ってクラスター分析を行った。これより、自然グループ、空グループ、まちなみグループではそれぞれ6つ、被写体グループでは5つのクラスターを得られた（図-4）。グループに共通する傾向として、同じクラスターに同時に出現することが多い項目のまとまりとして「1a, 3b, 4a, 4b, 4d」「3a, 4h」「4c, 4e」があることが読み取れた。また否定的感情が出現するクラスターでは同時に出現する項目数が他のクラスターと比較して少なかった。

次に得られたクラスター分析結果によるタイプごとに対応する写真を見て、写真に写されている要素や構図に共通する特徴があるかを確認した（表-6）。

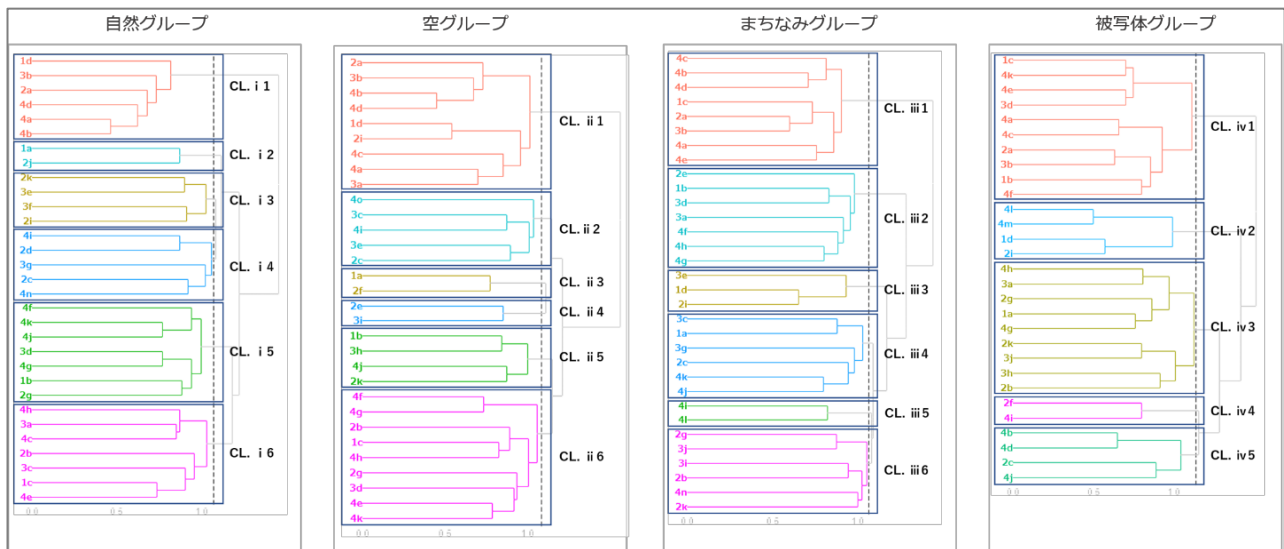


図-4 クラスター分析結果

表-6 タイプごとの状況と写真の特徴

グループ	タイプ	枚数	特徴	写真例	グループ	タイプ	枚数	特徴	写真例
自然	CL. i 1	58	「歩いているとき」「和む」「きもちいい」が多く指摘された眺めである。写真は近景から遠景までを含む奥行きが感じられるものが多い。		まちなみ	CL. iii 1	63	「歩いているとき」「眺めの全体的な構図や雰囲気」が多く指摘された眺めである。写真は両脇に街路樹のある遊歩道や、幅員の狭い道、住宅地が写されたものが多い。	
	CL. i 2	8	「初めての場所」「自宅以外の室内にいるとき」が指摘された眺めである。写真の構成要素・構図は様々であった。			CL. iii 2	33	「はっとした」「不思議」が多く指摘された眺めである。写真は高層ビルなど都会のまちなみが写されたものが多い。	
	CL. i 3	31	「自宅にいるとき」「季節を感じたこと」が多く指摘された眺めである。写真より、「季節」は樹木から認識されることが多いと考えられる。			CL. iii 3	30	「いつも来る場所」「自宅にいるとき」「よくわからない(きっかけ)」が指摘された眺めである。写真は電柱や隣接する建物が写されているものが多い。	
	CL. i 4	3	「屋外で座っているとき」「いやだな」が多く指摘された眺めである。写真の構成要素・構図は様々であった。			CL. iii 4	22	「風、音、匂いなど身体で感じたこと」「せつない」が多く指摘された眺めである。写真は夜の住宅地を撮影されたものが多い。	
	CL. i 5	31	「はっとした」「せつない」が多く指摘された眺めである。写真の場所としては川辺や開けた場所が撮影されることが多い。			CL. iii 5	17	「いやだな」「うっとうしい」が指摘された眺めである。写真は曇天時、電線や建物が撮影されることが多い。	
	CL. i 6	53	「ときどき来る場所」「懐かしい」が多く指摘された眺めである。写真の場所としては川辺や道路が撮影されることが多い。			CL. iii 6	46	「自転車移動しているとき」「何かを連想させたこと」が多く指摘された眺めである。写真は遊歩道、街路樹が写されたものが多い。	
空	CL. ii 1	51	「眺めの全体的な構図や雰囲気」「きもちいい」が多く指摘された眺めである。写真は雲が少ない写真が多い。		被写体	CL. iv 1	46	「歩いているとき」「和む」が多く指摘された眺めである。写真は建物や施設の入口、神社の鳥居が撮影されることが多い。	
	CL. ii 2	29	「風、音、匂いなど身体で感じたこと」「よくわからない(きっかけ)」が多く指摘された眺めである。写真の構成要素・構図は様々であった。			CL. iv 2	10	「自宅にいるとき」「うっとうしい」が多く指摘された眺めである。写真は建物が全面的に写されているものや地表面が写されているものが多い。	
	CL. ii 3	9	「初めての場所」「電車を待っているとき」が指摘された眺めである。写真は全てに雲があり、空の色は青、灰色であるときが多い。			CL. iv 3	20	「初めての場所」「不思議」が多く指摘された眺めである。写真は構造物の形や色が特徴的なものが写されているものが多い。	
	CL. ii 4	7	「信号待ちをしているとき」「何かを連想させたこと」が指摘された眺めである。写真に写る空の特徴は様々だが、車道と共に撮影されるものが多い。			CL. iv 4	5	「電車を待っているとき」「いやだな」が指摘された眺めである。写真の構成要素・構図は様々であった。	
	CL. ii 5	29	「まれに来る場所」「眺め・対象物への興味」が多く指摘された眺めである。写真は半分ほどが夕方で、電線など何かの要素が空と一緒に写されているものが多い。			CL. iv 5	26	「きもちいい」「すがすがしい」が多く指摘された眺めである。ランドマークや神社仏閣、線路が写されているものが多い。	
	CL. ii 6	76	「ときどき来る場所」「せつない」が多く指摘された眺めである。写真はグラデーションがかかった空が写されているものが多い。		※各タイプに含まれる全ての写真の枚数を表記しているため、写真の重複がある。				

表-6 より、写真に写されている要素や構図に共通する特徴の見られるタイプが存在することが確認された。要素・構図ともに様々な写真が存在したタイプとしては、CL.i 4, CL.ii 2, CL.iii 2, CL.iv 5 が挙げられる。以上より、クラスター分析により概ね 2.2 で立てた 2 つの仮説に沿った結果が得られたといえる。

自然グループでは、CL.i 1 や CL.i 2 のように奥行きを感じられる構図やスペースのある空間を撮影されることが多いことから、自然を感じると同時に広さを感じられることが眺めに目が留まる要因の一つであると考えられる。また背の低い植物より、樹木のような一定の背の高さがある植物が撮影されやすい傾向にある。

空グループでは CL.ii 1 および CL.ii 3 より、タイプが分かれる要因の一つに雲量があると考えられる。また回答として否定的感情が選択されることはあるものの、否定的感情を中心として構成されるクラスターは出現されなかったことから、空に目が留まるときはほとんどの場合において好印象がもたらされていると考えられる。

まちなみグループでは、住宅や電線といった人工的な構造物のみで構成された写真は、肯定的感情よりも否定的感情が選択される場合が多いことが明らかになった。肯定的感情が多く選択されるまちなみの風景としては、街路樹のように植物が同時に写された写真が多いことから、自然を感じられることが肯定的感情を誘発する要因の一つであると考えられ

る。また夜景も肯定的感情が多く選択される傾向にあり、昼景と夜景では同一視点からの眺めであっても印象が違って見えるために撮影される場合があることが示唆される。

被写体グループでは、建物が中心に写されている写真でも CL.iv 1 と CL.iv 2 のようにもたらす印象が異なる場合があることが明らかになった。これより、建物自体が悪印象を抱かせる要素となるのではなく、主体の視点や建物が視界に入る量によって目が留まるときの印象が変化することが示唆された。

4. 日常風景への意識の仕方

自省的考察の分析のため、アンケートの最後の質問の自由記述回答を KJ 法によって整理した。その際、「撮影した写真をふりかえて気づいたこと」については個別の写真に対する記述を除き、複数の写真に共通することや撮影という行為を通じ自身が考えたことについての記述を対象とした(表-7, 表-8)。

表-7 より、撮影した写真に対して、7 種の大分類から成る計 12 種類の考察が得られた。写真に共通する特徴として指摘された要素には「自然」「人工物」などのほか、「生活感」といった指摘も存在したことから、有形の要素だけでなくその場の環境や雰囲気も眺めに目が留まるきっかけとして影響することが考えられる。また同一視点からの眺めでも印象が変化することの要因として、季節・天候・時刻といった外的要因だけでなく、主体の当時の心情や気分といった内的要因も存在することが明らかになった。

表-7 撮影した写真をふりかえて気づいたこと

大分類	小分類・特徴	内容	例
共通する特徴(66)	構成(51) 撮影した写真に共通して写された要素などの特徴を言及している。	自然(15)	「どの写真にも緑がある。」
		空(4)	「空が写真に写りこんでいたり、写真の構成の主役になっていることが多い。」
		人工物(5)	「橋やタワーなど、わりと構造物を主体にして写真を撮っている。」
		生活感(5)	「私がいいなと思う瞬間の条件には『生活』を感じるといものが入っているのかもしれない。」
眺めに対する嗜好性(19)	印象(15) 眺めに対して共通して感じた印象を言及している。	構図や空間の良さ(20)	「選んだ写真は共通点として、奥行き感のあるものが多かったと思います。」
		夜景(2)	「夕景や夜景が多い。」
		爽しさ(8)	「すべて、多摩川のほとりと同じ場所から撮影した写真であったが、時間帯が異なるため、全く異なる風景であり、どれも非常に美しいと感じた。」
		せつなさ(1)	「夕暮れの写真はどれもせつなさを感じる。」
感じ方の変化の要因(11)	好印象(18) 好ましいと感じた眺めの要素などを言及している。	安心感(2)	「全体的に自宅付近なので、安心感を感じていた。」
		癒し(4)	「癒しに関する感情は、広大な風景や、孤立した空間に自分がいる時だとわかった。」
		驚き(1)	「写真を撮り返るとすべて何しろの『発見』や『驚き』があると思った。」
		自然(5)	「田舎出身のため、自然が好きなおもちゃが分りました。」
意識化される時(23)	悪印象(1) 好ましくないと感じた眺めの要素を言及している。	空(3)	「夕焼けや太陽をベースにした写真がほとんどだったので、自分は空が好きなんだな、と思いました。」
		構図(3)	「私は、両端に高い建物、中心部がスペースになっている構図の写真を実感的に好んでいることが分かった。」
		都心のまちなみ(2)	「田舎出身が慣れるような典型的な都市部の風景に魅力を感じているんだと思った。」
		夜景(4)	「全体的に自分は夜景を好む。」
眺めに対する考え(5)	同じ場所からの眺めでも感じ方が変化するときの要因を言及している。	動物(1)	「うらで飼っている猫や公園の鳩が意外なところにいるなど、動物の写っている写真が自分は好きなのかなと思った。」
		人(1)	「自分は人を写すのが好きでないことが分りました。」
		天候(5)	「眺めから感じるのは天気によって大きく左右されると思う。」
		時刻(3)	「そこにある建物は変わらなくても、太陽の位置や周囲の自然などにより、さまざまな感情を抱くことができるのだと気づいた。」
眺めの捉え方・行動(14)	撮影したくなるとき(18) 写真を撮影したいと思うきっかけとなる要素やタイミングを言及している。	季節(1)	「雲の量や様子によって、雰囲気の違いがわかる。季節によって雲の様子は変わるので、違った感じ方になることが予想できる。」
		主体の心情(2)	「普段見ている景色でも置かれていて環境や自分の心情次第で違った見え方になる気がした。」
		自然(5)	「散歩をしていて、ふとした瞬間に写真を撮ろうと思うのは、人工的に作られたものではなく自然のものが多く気がした。」
		空(6)	「私は空の色が綺麗だと写真を撮りながらなにが気が付きました。」
居住地への関心(10)	猫をよく撮っていた。	動物(1)	「猫をよく撮っていた。」
		普段との違い(2)	「普段とは様子が異なる時に写真を撮りたくなることが多いということに気が付いた。」
		個人的にも心地よくとも気持ちいいため、つい写真に収めてしまった。	「個人的にも心地よくとも気持ちいいため、つい写真に収めてしまった。」
		「自然のものに魅力を感じる傾向があり、ふとそれに目がうつろった。」	「自然のものに魅力を感じる傾向があり、ふとそれに目がうつろった。」
居住地への関心(10)	目が留まるとき(5) 眺めに目が留まるきっかけとなる要素やタイミングを言及している。	居住地の良い・悪い部分(2)	「長く住んでいるからなのか、良い意味ではなく悪い意味で気になる所に目が留まる傾向にあると気づいた。」
		現在の眺めへの関わり(11)	「自転車や自動車に乗っているのではなく、普段ゆっくり歩いているだけだと見通しの悪い危険性に気が付けない。おそらく道路を設計図を作ったときにはその見通しの悪さに気が付くことができなかったのだと思う。」
		現在の眺めの捉え方や意識する頻度を言及している。	「大学へ行く時いつも見る景色を教わりましたが、頻繁に通っていても、全く意識せずに通り過ぎていた」
		今後の眺めへの関わり(3) 今後どのように眺めを意識したいかを言及している。	「これからもっと周りの景色に目を向けていきたいと思う。」
居住地への関心(10)	居住地への思い(5) 居住地に対して思うことを言及している。	理解の深まり(5)	「開闢されていく街を見るのも切なく、どんどん無機質になっていくことにやり場のない怒りを感じていることに気が付いた。」
		改めて理解した居住地の様子について言及している。	「神社やトラス橋、高速道路、川、スーパー堤防など、様々な構造物や川に囲まれたところに住んでいることに改めて気づいた。」

表-8 日常風景について思うことや気づいたこと

大分類	中分類	小分類・特徴	例
風景の印象(45)	視対象の印象・魅力(10)	風景の中にある要素に着目し、その印象や魅力について言及している。	「歩道の幅など意識して作られていると感じた。」
	風景全体の印象・魅力(15)	風景全体の印象や魅力について言及している。	「日常の景色は毎日見るため普段はそこまで意識して眺めることはないが、何かに悩んでいるといった気持ちの変化の際にふと目に入り、いつもの景色が急にきれいに感じることがあると感じる。」
	変化による印象(20)	何かの変化(4) 日常の風景から何かが変化したときについての印象を言及している。	「日常的な場所は毎日足を運んでいるからこそ、小さな変化だけでは写真に収めたりせず見ただけで通り過ぎてしまう。しかし、いつも見ている風景に大きな変化が起きた時に写真に収めたくなくなった。」
		視点(1) 視点が変わることによって風景の印象が変わることを言及している。	「高速道路なども、車に乗っているときと、遠くから道路全体を見るのだと全く景色が異なるので面白いと思った。」
主体の考え方(36)		移ろい(15) 季節・天候・時刻の変化による印象を言及している。	「ふとした瞬間に目にとまる眺めはその時間帯や天候の影響も受けていると感じたため、貴重なものであると思った。」
	現在の日常風景との関わり(25)	主体の行動(6) 散歩や写真の撮影など、風景を見る際の自身の行動について言及している。	「初めて東京に住んで、東京はもっと都会なところだと思っていたけど、河川沿いには自然があったり、散歩道もあって自然豊かなので散歩するのが楽しいと思いました。」
		状況の変化(5) コロナ前後での自身の日常風景との関わりの変化を言及している。	「コロナ前の受験生時代や、部活をガチガチに取り込んでいた高校時代は時間がなかったため、自分の周りの眺めを撮影したりしたことは一度もありませんでしたが、コロナによって自分の時間が激増した結果、身近なものに対して、興味が湧くようになり、かつこつて言えば、撮影したりぼんやり眺めたりすることによって自分のこれまでの人生を振り返ることができているような気がします。」
		風景への意識(10) 日常の風景を普段意識する頻度や自身の風景への興味について言及している。	「大きなスケールの写真が多く、小さなスケールの風景の写真が少なくなっていたため、自分自身があまり目にとめていないものがはつきりしたと思う。」
居住地への関心(28)		風景のイメージ(4) 風景やまちのイメージについて言及している。	「全体を見渡した時に綺麗に見えるような構造になるよう考えられて都市は設計されているんだと思いました。」
	今後の日常風景との関わり(11)	主体の行動(2) 散歩や写真の撮影など、日常の風景を意識するために今後行動したいことを言及している。	「時間や季節によって、同じ場所でも違う印象を持つことに気が付いたので、出かける際も時間帯を変えることを意識すると、見慣れた建物や景色が違って見えるのではないかなと思いました。なかなか早朝に外に出ることはないで、これをモチベーションに早起きして散歩するのめいかなと思えました。」
		考え方の変化(8) 以前より日常の風景を意識したいということを言及している。	「普段日常の写真、とっていたが自分の思っていたより身近な眺めも面白いと思った。普段あまり意識していないが、電車で乗っている時、信号待ちしている時、ドライブに行っているときなどはもっと眺めをよく見てみようと思った。」
	愛着の自覚(14)	懐かしさ・安心感の認識(10) 居住地に対して懐かしさや安心感を認識したことを言及している。	「人生の大半を過ごした街なので、懐かしさを感じる事が多かった。」
居住地への関心(28)		愛着の自覚(4) 居住地に対して愛着を自覚したことを言及している。	「あらゆる時間が交差し染み付いた街の全てが好きです。」
	理解の深まり(14)	居住地の雰囲気・環境(9) 田舎を感じ、住みやすい、など居住地の雰囲気や環境について言及している。	「自分の住む地域は砂浜、漁港や堤防など海に関する風景、里山や獣道など緑に関する風景、住宅地や駅などの風景を持っており、いい場所だと思った。」
		居住地に存在する場所(5) 遊歩道や公園の発見など、居住地にある場所や施設について言及している。	「人や乗り物の多いイメージがある都内でも、散歩してみたら、静かな公園などの落ち着いた場所がたくさんあるということに気づいた。」

表-8 より、日常風景については3種の大分類から成る計15種類の考察を得られた。コロナの影響により自宅および自宅周辺にいる時間が長くなったことで日常風景を意識する頻度が増加したという記述が見受けられたことから、日常的な環境に触れる時間の量が日常風景を意識する頻度に影響していると考えられる。加えて、今まで日常の風景に意識を向けることがなかったということを認識した記述や、日常風景に面白さを感じたために今後風景を意識していきたいという記述も見受けられた。これより、日常風景に対する再認識を高める第一歩として、日常風景に興味・関心を持つことが重要であることが示唆された。

5. 結論

(1) 得られた知見

本研究では、日常風景に「目が留まったとき」の写真撮影とアンケート調査を通じて、目が留まるような日常の風景がどのようなものなのか、また、どのようにして意識されるのかを把握した。その結果、明らかになったことを以下に示す。目が留まるような日常の風景は撮影対象、構図、時刻や気象などにより4グループに大別され、さらに当時の主体の状況や感じた気持ちなどによって23タイプに分類された。また日常風景を意識するきっかけには視界に入る風景の要素や気象の変化などの外的要因と、主体の心情といった内的要因の両方が関係していること、日常風景を意識する頻度に影響する要因として

主体の普段の外出頻度など居住地での滞在時間の多さが関係することが明らかになった。さらに日常風景に対する再認識を高めるには、日常風景に興味・関心を持つことが重要であることが示唆された。

(2) 今後の課題

本研究は景観に関する授業を受講する大学生を対象としていたため、対象地が限定されない調査となった。したがって対象地を特定の場所に限定し、「目が留まる眺め」として回答された場所を具体的に特定して整理することで、対象地域の日常の風景を認識する手がかりの一つにすることができると考えられる。

<参考文献>

- 1) 社会法人日本建築学会，生活景，学芸出版社，2009
- 2) 渡邊優：観察者の捉え方の多様性に着目した生活の風景に関する研究，早稲田大学修士論文，2013
- 3) 文部科学省：大学等における後期授業の実施方針の調査について（地域別状況）（令和2年10月2日），https://www.mext.go.jp/content/20201002-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf（最終閲覧日：2020年12月28日）
- 4) 土木計画学研究委員会：「新型コロナウイルスに関する行動・意識調査」の実施と結果報告（速報），<https://jsce-ip.org/2020/10/22/covid19-survey/>（最終閲覧日：2020年12月28日）
- 5) 吉村晶子：無名の風景を題材とした写真作品の分析，景観・デザイン研究講演集，No.4，pp.344-354，2008
- 6) 平尾和洋，宮嶋聡，川崎清：「好きな景観」写真展にみる景観読解過程と景観タイプ，日本建築学会環境系論文集，第472号，pp.123-132，1995